

『就実教育実践研究』第11巻 抜刷  
就実教育実践研究センター 2018年3月31日 発行

# 子どもの造形表現理解の試み

— 「つぶやき」の検証を通して —

**Attempt to Understanding of the Children's Art**

— Through the Study of "MUTTER" of the Children —

藤 田 知 里

# 子どもの造形表現理解の試み — 「つぶやき」の検証を通して —

藤田知里 (初等教育学科)

Attempt to Understanding of the Children's Art  
— Through the Study of "MUTTER" of the Children —

Chisato FUJITA (Department of Elementary Education)

## 抄録

保育者にとって、幼児期の子どもによる造形は、「表現」という視点が重要である。しかし、実際には「結果」に惑わされたり、子どもの思いを汲み取れていなかったりする。本研究では、この課題に取り組むため、子どもの表現に対する保育者の見方の変容を目指し、「子どもの思い」に意識的に注意を向けることを試みた。方法として、保育者に子どもの「つぶやき」を記録してもらい、その傾向の分析を行った。記録①の結果、保育者はより多くの子どものつぶやきに耳を傾けようと試みているものの、保育者個人の造形に対する思いにも影響され、つぶやきに関連した保育のねらいの観点や子どもの育ちの捉え方には偏りが見られた。記録①の分析結果をフィードバック後、記録②を実施した結果、保育者は、様々な保育の領域に関連して子どもの思いに着目しており、記録①の課題に改善が見られた。

キーワード 造形表現, 造形指導, 子ども

## I はじめに

「人間は発見したことを外界に表そうとする欲求も持っています。例えば、美しい風景に出逢う（発見する）と、それを表現したくなります。文章の得意な人は文字で、絵を描くことが好きな人は絵で、写真を撮ることが好きな人は写真に、その感動を表そうとします。」<sup>1)</sup>と指摘されるように、表現とは人間の持つ本能的欲求である。子どもの場合、大人に比べ、その欲求はより純粋で、よりコミュニケーションに近いものとなるであろう。

幼児期は造形だけではなく、表現するための技術等、基本的な機能を獲得する時期でもあり、さらに子どもの効力感や有能感を高め、自分の表現を育む。その活動を通して自分の心と身体を育て、周囲の世界に働きかけ、つながりをつくり、生きる力を育成することになる。また、造形的な活動が世界の理解を助け、子どもの全体的な発達に結び付く。表現を続けることによって、表現する自分と他者との相互作用が生まれ、コミュニケーシ

ンだけではなく、情緒の安定を体得することができる。

また、平成29年度告示の『幼稚園教育要領』「第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼稚園教育において育みたい能力及び幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」としては、「(10) 豊かな感性と表現 心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。」<sup>2)</sup> また、領域「表現」のねらいとしても「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」<sup>3)</sup> と示されているように、保育における子どもの造形活動においては、子どもの「表現」を支え広げる視点が重要である。

さらに、今回の改定で「表現」の内容の取扱い部分に「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。」<sup>4)</sup> と追加され、子ども自らが体験を通して心動かされることの重要性が示されていることから、「(造形表現)」とは子どもの思いの表しであることが強調されていることは明らかである。

このように子どもにとっての造形は「表現」であるにも関わらず、造形教育の現場では、大人の見方で子どもの作品を捉えている、過程よりも結果を重視している、あるいは子どもの個性を無視している等、展覧会等に見られる「結果主義」が長年の課題であったことは周知のとおりであり、「表現」の豊かさではなく、「作品」の優劣によって判断されがちである。<sup>5)</sup>

本研究では、その課題に取り組むため、保育者が子どもの思いに意識的に注意を向けることにより、子どもの表現に対する見方を変容させることを目指し、それらの知見をもとに子どもの造形表現指導について新たな視座を得ようと試みた。

## II 方法

保育者が子どもの思いを理解するための取り組みとして、本研究では、保育中の子どもの「つぶやき」に着目することにし、保育者が保育中気に留まった子どものつぶやきを「つぶやきドキュメンテーション」に記録した。記録するつぶやきは任意だが、記述内容は以下のとおりである。①日時、②記録者、③子どものつぶやき、④つぶやいた子どもとその相手、⑤そのときの保育の内容及び状況、⑥なぜそのつぶやきが気になったのか、⑦保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち。

本研究で研究に協力いただいたのは、O県内私立A幼稚園15名の保育者である。記録期間は2017年2月から7月までの半年間を記録①、9月、10月の2カ月間を記録②とした。記録①と記録②の間に、記録①に関する分析結果のフィードバックを行った。これらの記録の分析をもとに、保育者が子どものつぶやきを捉える傾向について考察を行った。

なお、保育者には事前に自身の造形に対する思いについてのアンケートを実施した。

### Ⅲ 記録①の結果

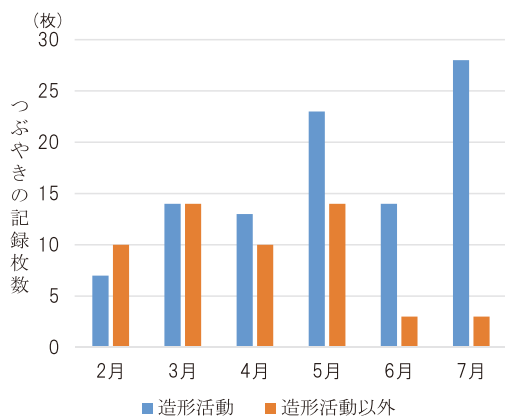


図1 つぶやきが記録された保育場面（記録①）

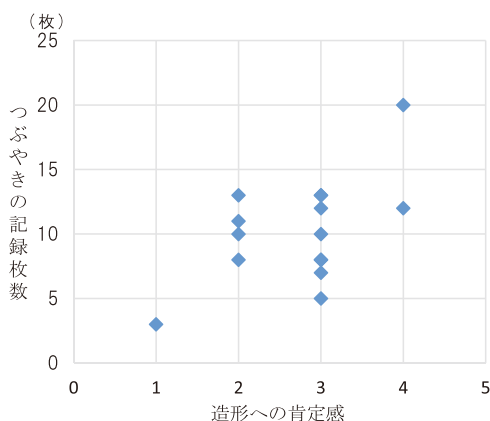


図2 つぶやきの記録枚数と造形に対する肯定観（記録①）

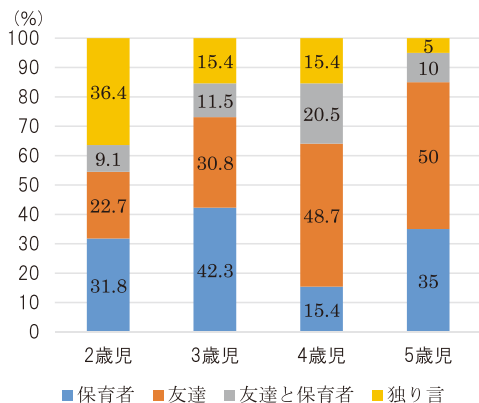


図3 担任クラス年齢別つぶやきの相手（記録①）

#### 1 記録① つぶやきの記録枚数と子どもの数

記録①におけるつぶやきの記録総数は153枚で、1人の保育者が記録した枚数は最少3枚から最多20枚、平均10.2枚であった。つぶやきを記録された子どもは延べ199名、実質は161名で、1人の保育者がつぶやきを拾った子どもの実数は最少4名から最多28名、平均すると10.7名となった。

つぶやきを記録した保育場面として、造形活動は、全体の64.7%であったが、記録を始めた2017年2・3月では46.5%、4・5月は61.9%、6・7月は85.1%と、急激に増加している。月ごとのつぶやきを拾った造形場面の件数とそれ以外の場面の件数は図1のとおりである。

また、保育者自身の「造形に対する思い」に関するアンケートでは、「好き」から「苦手」までの4段階で回答してもらったところ、図2のように、造形に関し肯定的な感情を持っている保育者は、つぶやきの記録枚数も多かった。

#### 2 つぶやく相手

つぶやきドキュメンテーションに記録された子どもがつぶやく相手を「保育者」「友達」「保育者と友達」「独り言」に分類すると、図3のとおり、低年齢のクラス担任は、独り言のつぶやきを多く記録していた。

2歳児では、全体の36.4%、3歳児では15.4%、4歳児では15.4%、5歳児では5.0%と受け持つ子どもの年齢

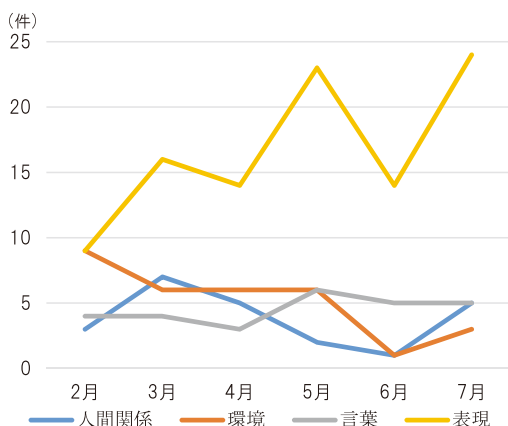


図4 つぶやきに関する保育の領域件数(記録①)

が高くなるに連れ、減少傾向が見られた。

反対に年齢が高いクラスを受け持つ保育者が記録したのは、子ども同士、あるいは教師を交えた子ども同士の会話からのつぶやきが多かった。

### 3 つぶやきの内容

記録されたつぶやきの内容は、子どもの発見の喜びや造形に対する思い等、様々であったが、子どもが「～できない」「～したくない」等、活動に

対して、否定的になっているときのつぶやきは記録されていなかった。

つぶやきドキュメンテーションの「保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち」の項目では、表現領域に関するものが104件、環境が31件、言葉が27件、人間関係が23件で、健康については0件であった。月毎の領域別の件数は、図4のとおりである。

### 4 記録①の考察

つぶやきの記録総数、つぶやきを記録された子どもの延べ人数と実質の人数を比較すると、それぞれの保育者が同じ子どものつぶやきばかりではなく、多くの子どものつぶやきに耳を傾けようとしていることがわかる。とは言え、連続して記録された同じ子どものつぶやきには、異なる保育場面ではあっても表現に表れる思いとして関連するものがあり、同じ子どものつぶやきを、日を追って記録することで、子どもの思いを把握することができた記録もあった。

#### つぶやき事例1

##### ① 2017年5月19日3歳児Y

子どものつぶやき 「あめあめふれふれかあさんが♪…もっともっとふらそうっと」

保育の内容及び状況 初めてのマーカーと絵具を使って絵を描く活動。綿棒で雨を1粒ずつ描いていた時。

##### ② 2017年5月23日3歳児Y

子どものつぶやき 「ちょんちょんちょんちょんおもしろい」

保育の内容及び状況 にじみ絵(マーカー)の活動。

上記の記録からは、①で子どもがリズムを感じながら楽しく描画した思いを②でも再び味わっている。このように、保育者は子どもの表現に対する思いを、表現するその場面だけではなく、子どもの一連の生活を通して汲み取ろうとしていることがわかる。

## つぶやき事例2

### ① 2017年4月26日2歳児R

子どものつぶやき 「てんてん、ピンク！」

保育の内容及び状況 指スタンプで指にピンクと緑のインクをつけて、カードにスタンプをする活動。

### ② 2017年6月26日2歳児R

子どものつぶやき 「あっ、ピンク！！」

保育の内容及び状況 色ペンで紙に絵を描き、その作品を水でにじませる活動の後、乾かしていた時。

また、上記のように、2歳児が4月にスタンプ活動でピンクという色と言葉を関連付けて体験しており、6月の活動では、赤からピンクへ色が変化したことに対する驚きの声を上げていることが記録されている。

## つぶやき事例3

### ① 2017年6月19日4歳児MとY

子どものつぶやき 「落ち葉を入れたら食べたよ！」「こっちは花びらも食べてる！すごいね。」

保育の内容及び状況 捕まえたダンゴムシのために餌を探していた時。

### ② 2017年7月13日4歳児RとK

子どものつぶやき 「服がやぶれてるが！」「ダンゴムシが脱皮するみたい！ダンゴムシは皮を脱ぐんで！」

保育の内容及び状況 黒いビニール袋を服に見立てダンゴムシごっこをして遊んでいた時。

上記の記録は同じ子どものつぶやきを記録したものではないが、ダンゴムシを飼育する活動を通して、子どもたちの間でダンゴムシに対する関心が広がっている様子を把握できる。このように、特に4歳児、5歳児クラスの担任の記録からは、一連の保育を通して、複数の子どもたちが共有している思いやイメージに関するつぶやきの記録が見られた。

また、図3のように、子どもの独り言としてのつぶやきの記録が担任するクラスの年齢が上がるにつれ減少しているのは、4歳児、5歳児ではコミュニケーション能力が高くなり、つぶやく相手が明確であることが要因と考えられる。そのため、保育者が子ども同士のコミュニケーションをより多く気に留めることができたのではないかと。

本研究の目的から、造形活動場面におけるつぶやきが多数を占めることとなり、造形に自信のある保育者が、子どものつぶやきに留意することが多かった。そのため「保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち」の項目に関しては、「表現」領域の育ちに関するつぶやきが目立ったことは否めない。とは言え、保育を5領域全ての観点から捉える必要性を考えれば、造形活動の指導において「表現」以外の領域の育ちに関する視点も必要かと思われる。

また、活動に対して否定的な子どものつぶやきが見られなかったことに関連して、上記の項目では、子どものつぶやきを「～に対する育ちが見られた」「～できるようになった」等、活動における「ねらいの達成」として捉えているものが多数を占めた。「～ができなかった」というような記録はなかった。

保育において、子どもが作りたいたいと思う気持ちや表現したい思いに駆られて活動できることは理想であり、保育者の意図に沿って子どもが応えてくれたときには、そのつぶやきを取り上げたくなるだろう。ただ、子どもの表現には否定的な思いが含まれていることもあり、それに保育者が気付くことこそ重きをおくべきではないか。子どもがうまく造形に乗ってこないとき、保育者の予想に反する活動をしたときにこそ、その子どもの思いやつぶやきに心を寄せる必要があるのではないか。

#### IV 記録②の結果

##### 1 記録② つぶやきの記録枚数と子どもの数

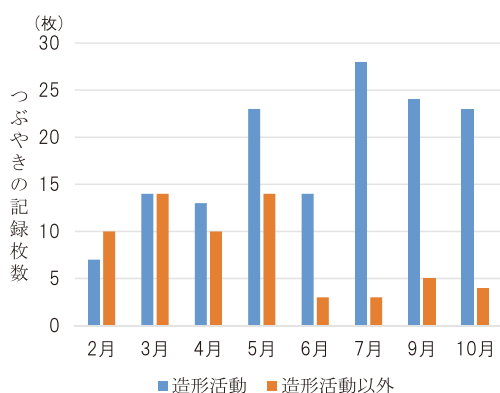


図5 つぶやきが記録された保育場面（記録②）

記録①の考察を踏まえ、9月、10月と再びつぶやきの記録を試みた。記録②の前に、記録①の結果と分析結果について保育者にフィードバックを行った。

つぶやきの記録枚数は計56枚、1人当たり平均すると3.7枚、活動場面としては、造形活動の場面が47件、83.9%であった。つぶやきを記録された子どもは延べ69名、実質は66名であった。

##### 2 記録② つぶやく相手

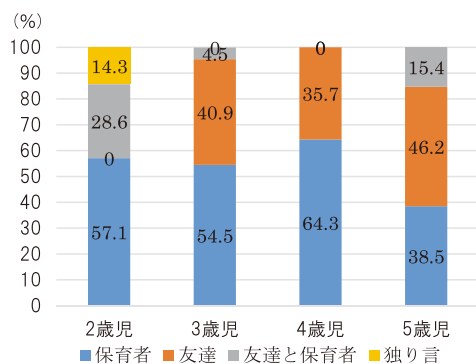


図6 担任クラス年齢別つぶやきの相手（記録②）

図6に見られる通り、年齢の高いクラスの担任は子ども同士のコミュニケーションを多く記録している傾向は記録①と同様である。しかし、記録①と比較すると「独り言」のつぶやきがすべての年齢のクラス担任の記録において減少している。2歳児クラスでは、記録①の36.4%から14.3%、3歳児クラスでは15.4%から0%、4歳児クラスでは15.4%から0%、5歳児クラスでは5.0%から0%となっている。

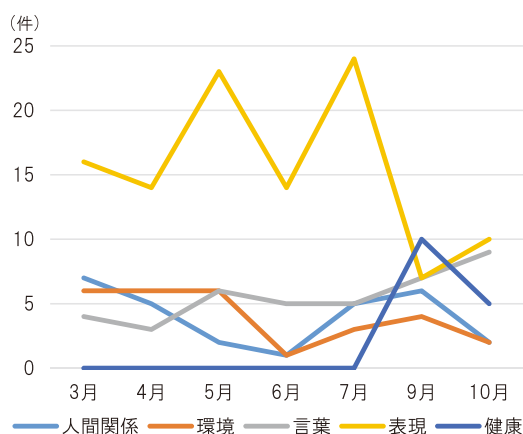


図7 つぶやきに関する保育の領域件数（記録②）

に対する否定的な言葉を拾ったものが、8件あった。8件のうち、保育のねらいの達成と捉えている記録が3件、課題として捉えているものが4件であった。

## VI 記録②の考察

図5に見られる通り、どの年齢のクラス担任が記録したつぶやきにおいても、子どもの独り言としてのつぶやきが減少していることは、それぞれの子どもの成長によるものが一因であると考えられる。特に1学期における2歳児担任の記録には、「言葉が少なくつぶやきを記録するのが難しい」との記述もあったが、2学期となり、少しずつ子ども自らの思いを言葉にすることができるようになったのであろう。その他の学年においても、子ども同士のコミュニケーションが深まりつつあることに加え、1学期に実施した記録①のときと比べ、保育者が自分の周りの子どもだけではなく、少し離れた子ども同士の会話にも耳を傾ける余裕を持つことができるようになってきたということであろう。

また、子ども同士の会話の中でも、複数の子どもたちが話合っている場面のつぶやきが記録①より多く記録されている。特に5歳児のつぶやきからは、以下の例のように子どもたちの活動における協力や場の共有が進んできていることを把握できる。記録①のときには、友達に向けたつぶやきの中で、友達と情報を交換したり、相談したり、フォローしたりするつぶやきは友達に向けたつぶやきの23.3%のみであったが、記録②では60.6%に増加している。

### つぶやき事例4

2017年10月30日 5歳児KとM

子どものつぶやき 「ぼくはここに貼るから、次は○○ちゃんね！」「順番にすればええが！！」

保育の内容及び状況 お話『だいくとおにるく』のおにるくの張り子づくりを始めた時に、折り紙を貼る順番を話合っていた。

## 3 記録② つぶやきの内容

記録されたつぶやきの内容は、記録①と同様様々であったが、つぶやきに関する「保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち」の項目では、表現領域に関するものが17件、言葉が16件、人間関係が8件、環境が6件で、健康が15件であった。月毎の領域別の件数は、図7のとおりである。

記録①では、活動に対する子どもの否定的なつぶやきは記録されなかったが、記録②においては、子どもの活動



つぶやきに関する「保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち」に関しては、図7のとおり、表現領域に関するものがなお多いものの、その他の領域との件数の開きが減少してきている。記録①の結果を受け、それぞれの保育者が自らの造形指導におけるねらいとして、表現領域以外の領域に関しても、意識的に取り入れるようになってきた結果と考えられる。

また、記録①では見られなかった、「～できなかった」というような活動に対する子どもの否定的なつぶやきが記録されていたことに関し、保育者が自らの保育の意図に沿ったものだけではなく、子どもができなかったことや、活動に意欲を示さなかったときのつぶやきに対しても、その子どもの思いを受け止めようとしていることがわかる。

また、子どものつぶやきが否定的なものであったとしても、保育のねらいによっては、肯定的に捉えることもでき、また、ねらいが達成できなかったとしても、次につながる振り返りとなる。

## 子どものつぶやきをねらいの達成と捉えている記録

### つぶやき事例5

2017年10月17日3歳児S

子どものつぶやき 「三角が描けない、やり方がわからない。」(泣きながら)

保育の内容及び状況 動物園のライオンを描いている時、顔をよく観察すると鼻が三角だ！という気づきがあった。

そのつぶやきに関する子どもの育ちについて 言葉の領域(3)したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。

## 子どものつぶやきを課題として捉えている記録

### つぶやき事例6

2017年10月30日3歳児R

子どものつぶやき 「だめ・・・」「頑張れない！」

保育の内容及び状況 1人1台段ボールでバス作りをしたあとに、「みんなの乗れるバスは大きいよ、色塗り頑張れるかな」と尋ねたところの即答。

そのつぶやきに関する子どもの育ちについて マイナスの言葉には、手が汚れて頑張れないとの思いが強かったのだが、「健康」にある「様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む」ことができるように、汚れが拭き取れるようにするなどの配慮があれば楽しみ方も変わったのではと反省している。

### つぶやき事例7

2017年10月2日4歳児S

子どものつぶやき 「葉っぱにしか見えない。」「もう今日は終わりにする～」

保育の内容及び状況 自由遊び中、画用紙に落ち葉を貼って、羽を作って(イメージして)制作活動をしていた。

そのつぶやきに関する子どもの育ちについて 教師が制作したものを見て、イメージを膨らませ、より興味をもって活動に取り組んでくれたらと考えていたが、子どもの心をつかむことができなかった。

上記のように「保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち」に関する保育者の記録からは、保育者の意識の変容が確認できる。

## VI おわりに

本研究で明らかになった点は以下のとおりである。

- ①つぶやきドキュメンテーションを記録するにあたり、保育者はなるべく多くの子どものつぶやきに気を留めようとしている。
- ②つぶやきドキュメンテーションの記録から、保育者が気に留める子どものつぶやきは、つぶやく相手が子どもの成長に合わせて変化を見せる。低年齢のクラス担任は、子どもの独り言としてのつぶやきを記録することが多く、子どもの年齢が上がるにつれ、友達同士、あるいは保育者を交えた友達との会話からのつぶやきを記録している。
- ③記録①では、保育におけるねらいの達成と捉えたつぶやきの記録が多かったが、記録①の分析結果をフィードバック後実施した記録②では、活動に対し否定的な子どものつぶやきに対しても今後の課題として受け止めた記録が見られるようになった。
- ④記録①では、「保育の領域と内容に照らし合わせた子どもの育ち」に関しては、表現領域に関するものが多くを占めたが、記録①の分析結果をフィードバック後実施した記録②では、表現領域以外の領域に関するつぶやきの記録が増加し、5領域それぞれの記録件数の差が減少した。

本研究では、保育者が気に留める子どものつぶやきを分析し、その傾向を明らかにすることにより、保育者が子どもの思いを理解し、子どもの思いの表しである造形表現に対する姿勢の変容を目指した。

子どもの中には思いを言葉にすることが苦手な子どももおり、子どもの「つぶやき」のみで子どもの思いをくみ取ることはできない。しかし、「子どものつぶやきを記録する」この取り組みを通して、保育者は、「つぶやかない」子どもたちの表情やしぐさ等にも注意を向けたことであろうし、つぶやきドキュメンテーションに記録されていない多くのつぶやきもそれぞれの保育者によって記憶されていることであろう。その点においても、子どものつぶやきに着目することによって、保育者の資質の向上を図ることができたのではなかろうか。

今後の課題として、つぶやきの記録を始めたことによる保育者自らの保育に対する意識の変容について引き続き研究を進める。

## 引用文献

- 1) 和久洋三, 2006, 『遊びの創造共育法①』, 玉川大学出版部, pp.30-31.
- 2) 2017, 『平成29年告示幼稚園教育要領』, フレーベル館, p.7.
- 3) 同上, p.20.
- 4) 同上, p.21.
- 5) 鬼丸吉弘, 1996, 『創造的人間形成のために』, 勁草書房.